

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 板橋 暁子

漢帝国が崩壊したのち、三国の分裂を挟んで、西晋は天下を統一するが、わずか三十年ほどで匈奴の勢力に都を占領され、懷帝と愍帝は相継いで拉致される。この混乱の中で、西晋は滅亡し、東晋五胡十六国と呼ばれる分裂の時代に入る。本論文は、この時代に華北を失い「周縁」たる地で再興された中華王朝と華北に分立する諸政権との間で取り交わされた上表文や詔、書簡などを丹念に読み込むことで、この時代に新しい中華の帝国理念が生まれたことを論じたものである。

第一章は、これまで分裂後の一地方政権と位置づけられてきた西晋末の愍帝政権について、実は秩序の回復を天下に呼びかけ、それに応ずる者に官爵を授けることで、一定の求心力を保ち、天下の輪郭を維持していたことを明らかにした。第二章は、中国西北部に割拠した前涼政権が、東晋に臣属しつつも、国内では長期にわたって愍帝が建てた「建興」年号を用い続けていたことを取り上げた。史書はその理由を明記していないが、前涼から東晋に送られた上表には、愍帝政権の時、江南に割拠していた司馬睿政権(愍帝の死後、東晋を樹立)よりも積極的に愍帝の呼びかけに応じて勤王に努めた矜持が読み取れ、前涼政権の「建興」年号使用は、天下を支える勤王の側の主体性を示したものであるとした。第三章は、愍帝による鮮卑拓跋氏に対する代王冊封について、愍帝は拓跋氏の支援を引き出すために、はじめて異民族の首長である拓跋氏を内地の王に冊封したが、通常は与えられるはずの官職を授けないことによって、瀬戸際でなお旧来の天下秩序を維持しようとしたことを明らかにした。第四章は、司馬睿即位の際に行われた華北諸勢力からの勸進について取り上げ、華夷がともに天下を支える意識がそこに生まれていることを明らかにした。第五章と第六章は、中国東北部に割拠した鮮卑慕容氏の燕王冊封に至る経緯を取り上げ、慕容氏は勤王と天下の統一を呼びかけていくことで、東晋政権内に支持者を獲得し、ついには内地の王となることを東晋に認めさせることに成功したことを明らかにした。第七章は、この時代を通じて一貫して東晋の藩屏であり続けた氏族楊氏の仇池政権について論じた。

以上のごとく、本論文は、古代帝国の崩壊後も、王朝からの呼びかけと各地の親晋勢力の応答によって中華帝国の輪郭が観念的に維持される一方、異民族の首長もそれを支える主体となっていく過程を示した。委員の中からは、華北諸政権の性格の分析や制度と理念の関係、通史的あるいは世界史的な視野の中での意義づけに、厳密さや明確さを求める意見があった。しかしながら、両晋五胡十六国という時代を漢帝国崩壊後の分裂期という以外に一個の特色ある時代として位置づけた功績は評価できる。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。